

文化女大家政 ○田村照子 嶋根歌子 丸山康子 井上愛子 岩崎房子

〔目的〕 同一被覆面積の衣服であっても、その被覆部位によって保温効果の異なることが指摘されている。その原因としては被覆部位の曲率などの物理的要因に加えて、皮下の知覚神経分布密度の部位差などの生理的要因も考えられる。本報ではこれらに関連して、皮膚表面の温熱感受性の部位差について実験を行ない、2、3の知見を得たので報告する。

〔方法〕 熱負荷用のプローブは、直径3.6cmの市販板状ヒータ（坂口電熱SAMICON230）の両面に銅板を接着したもので、銅板表面上の温度は常に38℃に維持されるよう、スライダックで調整された。温熱感受性の測定にあたっては、被験者の皮膚にこのプローブを2秒間接触させその温熱感を1対比較法によって答えさせた。被験者は健康な成人女子10名で、ビキニ型実験衣のみ着用、姿勢は仰臥位または伏臥位とした。測定部位は頭頸部 5、体幹部 7、上肢 6、下肢 6の計24部位である。ただし全部位の1対比較は姿勢および測定時間の関係上不可能であったため、測定は前面と後面に分けて行った。測定環境条件は、気温26℃、気湿50%、気流<20 cm/sである。

〔結果〕 1. Gulliksenによる尺度構成を行った結果、温熱感受性の高い順に前面では、上腹、下腹、胸、頸、前額、顎、頬、肩、大腿、前腕、上腕、足背、下腿、手掌となり、後面では、胴、腰、頸、背、大腿、肩、上腕、前腕、手背、下腿、足底となった。共に、体幹>頭頸>腕脚>下腿・手足の順であり、同一被覆面積でも手足より体幹を露出するとより寒く感じる事が示唆された。2. 前面と後面の比較では、屈側で伸側より温熱感受性が高い傾向が認められた。